

【論文】

『皇明馭倭録』の「寄語^{註1}畧」について

蔣 垂東

The *Jiyulüe* in the *Huangmingyuwolu*

JIANG Chuidong

要 旨：

本文主要介绍《皇明馭倭録》“寄語略”所收的汉日对音词汇。明清时期的中国古文献中常可见到汉日对音词汇，这些汉日对音词汇不仅是研究日语的珍贵史料，同时作为汉语方言资料也具有重要价值。人们虽然早已知道《皇明馭倭録》收有汉日对音词汇，但是由于种种原因它的内容至今尚未被弄清。本文拟依据北京图书馆及清华大学图书馆藏本的调查结果，揭开该书“寄語略”所收汉日对音词汇之面纱。

キーワード：音訳日本語、日本寄語、寄語島名、中国資料、
方言資料

0 はじめに

明代（1368～1644）に成立する中国の文献には中国人が漢字を使って写した日本語が少なからず見られる。『書史会要』（陶宗儀著、1376年成立）、『日本考略』^{註2}（薛俊著、1523年成立）、『日本館訳語』（1549年校正）、『日本一鑑』（鄭舜功著、1565,6年頃成立）、『日本風土記』（侯継高著、1592年頃成立）などがその代表的なものとして広く知られている。これらの文献に収録されている日本語は「中国資料」と呼ばれて日本語史の資料として重要視され、また中国語の方言資料としても注目を集めている。

上記の内、特筆すべきなのは『日本考略』である。日本研究書の先駆けである同書では、日本事情の一環として言語の部である「寄語略」が掲げ

『皇明馭倭録』の「寄語畧」について

られ、天文、時令など15の意義類別に、計362の日本語の単語が漢字音訳の形で収録されている。この「寄語畧」は同書の他の多くの記事とともに後世の多くの書によって転載され、深い影響を与えた。但しその原刊本が散佚してしまい、東洋文庫所蔵の重刊本は知られている唯一の明刊と言われている（福島邦道1965:2-3）。

最初に『日本考略』の「寄語畧」を転載したのは、鄭若曾の『日本図纂』（1561年成立）である。『日本図纂』では作者が独自に採録した日本地名の音訳「寄語島名」と共に『日本考略』の「寄語畧」が「寄語雑類」の名称で掲載されている^{注3}。この「寄語島名」と「寄語雑類」は同じ著者による明代随一の日本研究書といわれる『籌海図編』（1562年成立）を経て、後の『籌海重編』（鄧鐘編、1592年成立）、『登壇必究』（王鳴鶴著、明萬曆年間成立）、『武備志』（茅元儀著、1621年成立）^{注4}など多くの文献に転載された。『全浙兵制考附録 日本風土記』^{注5}も「寄語島名」と「寄語雑類」の一部（人事類・鳥獸類）を引用している。なお、清代の『續説郛』（陶珽編、1646年成立）と『欽定古今圖書集成』（陳夢雷原編、1725年初刊）が「寄語畧」を「日本寄語」の名称で転載していることから、「寄語畧」は「日本寄語」とも呼ばれている。

中国の古文献における日本語の収録状況及び諸本における「日本寄語」の転載状況についてはすでに、浜田敦（1940）、安田章（1961）、大友信一（1963）、福島邦道（1965）など諸先学によって多くの点が解明されてきた。しかしながら、明代の文献で日本語を収録していることが知られていながら、内容が明らかにされていないものがなお存在する。本稿で取り上げる『皇明馭倭録』もそうしたものの一つである。

吳玉年（1947）によって、『皇明馭倭録』は北京図書館本と清華大学図書館本の存在が確認され、内、清華大学図書館本の附略に「寄語畧」が存在しているらしいということはすでに知られている。しかし、「日本にはない（福島邦道1961:61）」ため、

『皇明馭倭録』の清華大学図書館本の附録にあるという「日本語」とは、どんな内容のものかが伺えないことは、誠に遺憾である（大友信一1963:138）。

といったように、その内容の解明が懸案となっている。筆者は、数年前より数度か北京図書館本と清華大学図書館本（共に明万曆刊本）について調査した。その結果、清華大学図書館本と同様、北京図書館本にも「寄語略」が存在しているという事実を確認することができた。以下では、同書の「寄語略」を中心に調査結果を報告したい。

1 書誌的説明

『皇明馭倭録』については、『四庫全書総目』（雑史類存目三）と呉玉年（1947）に解題が見られるが、同書の「寄語略」を取り上げる前に、蛇足ながらその概要についてもう少し詳しく見ておきたい。

1.1 概要

清華大学図書館本と北京図書館本は共に、『皇明馭倭録』九巻の他に、『皇明馭倭録附略』二巻、「寄語畧」一卷から成り立っている。冒頭に、光祿大夫太子太保吏部尚書兼建極殿大学士王錫爵の「皇明禦倭録序」、続いて著者王士騏の「皇明馭倭録小序」がある。左右双边で、每半葉十行、每行二十字である。版心上部に「皇明馭倭録」、次いで魚尾、「卷一（～九）」、下部に「丁数」が刻されている。「寄語畧」を除く各巻の一頁目に「兵部車駕清吏士主事 臣王士騏纂」と記してある。

清華大学図書館本は七冊で、原表紙はすでに失われ、現装の紺色表紙は後補によるもので、題箋はない。冊数と巻との関係は以下の通りである。

第一冊 卷一

第二冊 卷二卷三卷四

『皇明馭倭録』の「寄語畧」について

第三冊	卷五
第四冊	卷六
第五冊	卷七
第六冊	卷八卷九
第七冊	附略卷之一、卷之二、寄語畧

一方、北京図書館本は四冊で、縦19.8センチ、横14センチ、それぞれに下記の題箋がついている。

第一冊	馭倭録	卷一二三四
第二冊	馭倭録	卷五六
第三冊	馭倭録	卷七八九
第四冊	馭倭録	附略

北京図書館本は、王錫爵序の一丁目、附略卷之二の七丁目、それに「寄語畧」の十六丁目など欠丁が見られる。

1.2 著者と編纂の動機

著者王士騏は太倉（江蘇省東南部）の人で、『明史』卷二百八十七「文苑三・王世貞傳」の末尾に、

世貞子士騏、字罔伯、舉鄉試第一、登萬曆十七年（1589）進士、終吏部員外郎、亦能文。

という伝記から、尚書王世貞の子であることが分かり、その著書は、『明史』卷九十七「志第七十三・芸文二」に、「馭倭録 八卷」の他、「苻秦書十五卷、銓曹紀要十六卷」も見える。

『皇明馭倭録』は著者王士騏が兵部主事に在任した時に、倭寇対策に関す

る皇帝の詔旨及び諸臣の章奏記事を採録して出来たものである。編纂の動機については、著者の「皇明馭倭録小序」の

紀倭事者有薛浚之考畧有王文光之補遺而鄭若曾之籌海図編加詳焉臣不佞誦之而嘆其用意之勤也己稍々參以国史始恨事略者百不得一而一旦失真士大夫不考于先朝之故事而動以野史為証則所誤多矣乃就国史中一一拈出自高皇帝以至穆廟列為編年謀之距公題曰皇明馭倭録盖列聖之詔旨諸臣之章奏公私創革之始末中外戰守之機宜悉在焉神而明之可以酌祖訓可以定廟謨可以廣朝士之見可以正野史之謬 …以下略…

によって察知することができる。即ち、日本についての書籍として、薛俊の『日本国略』、王文光の同補遺、それに鄭若曾の『籌海図編』があったが、これらの文献はいずれも野史を証とし、真実を失ったところが多いのを理由に、編年体形式で皇帝の詔旨や諸臣の章奏を集めることにしたということである。

なお、皇帝の詔旨や諸臣の章奏の収録期間については、呉玉年（1947）が指摘した通り、『四庫全書総目』に、「起洪武元年、訖萬曆二十四年（1596）」とあるが、誤りである。次節で示すように正しくは、「起洪武二年（1369）、訖隆慶六年（1572）」とすべきである。

成立の時期は不詳だが、巻末に萬曆二十四年（1596）御史朱鳳翔による胡宗憲の優叙についての上奏文が見られることから、1596年以降の成立と推測される。

1.3 構成と内容

各巻の内容は以下の通りである。

序文

『皇明馭倭録』の「寄語畧」について

- ・皇明禦倭録序（王錫爵）
- ・皇明馭倭録小序（王士騏）

卷一～卷九 皇帝の詔旨及び諸臣の章奏

- ・卷一 洪武二、三、五～九、十二～十五、二十七、二十九、三十一年
- ・卷二 永楽元年、二～九、十一、十三～十九年
- ・卷三 洪熙元年、宣徳元年、二、四、十年、正統元年、二、四～十三年
- ・卷四 景泰元年三～六年、天順二、三年、成化四～六年、弘治九、十二、十三、十八年、成徳四、五、七、十三年
- ・卷五 嘉靖二、四、六、十八、一九、二十七～二十九、三一～三十三年
- ・卷六 嘉靖三十四年
- ・卷七 嘉靖三十五、三十八年
- ・卷八 嘉靖三十九～四十五年
- ・卷九 隆慶元年、三、四、六年

附略卷之一 日本の概要

- ・中国歴代正史の日本伝を引用したもの
後漢書、三国志魏書、晋書、宋書、齊書、梁書、隋書、旧唐書、新唐書、宋史、元史
- ・正史以外の書物から引用したもの
汎海小録、倭志四部稿

附略卷之二 日本関連の詩と文

- ・唐代中国詩人の詩文
送晁旧作朝非監還日本国序（王摩詰）、送晁補闕歸日本国（趙驥）、送日本国聘賀使晁臣卿東歸（包佶）、重送陸侍御史日本（錢起）、送日本使還（徐巖）、哭晁卿行（李太白）、送秘書晁監還日本国（王摩詰）
- ・隨筆などから抄出した日本関連のエピソード

日本王子、紙衣和尚（『癸辛雜識』）、倭人居処（『癸辛雜識』）、日本国車（『文昌雜録』）、南倭海水（『清波雜記』）、日本国斂尸（『墨池浪語』）、琉球畏神（『使琉球録』）、逸書百篇（『双槐歳抄』）

・日本人が作った漢文と漢詩

戒嚴王師行成表、詠西湖、春日感懷、奉邊將、答風俗問、題春雪、游育王、萍、保叔塔、被張太守禁舟中嘆懷、四友亭、從紹興雨中往曹娥、又、又、謁舜廟作

寄語畧 漢字音訳された日本語の語彙と地名

- ・寄語畧 日本語の語彙 358個
- ・寄語島名 日本の地名 81個

2 附略について

附略卷之一と卷之二に見られる日本の概要及び日本人の作った詩文と『日本考略』など、先行する日本研究書との違いについて簡単に触れておきたい。また、中国人の日本関連詩文についても気づいた点を簡単に述べておきたい。

2.1 日本の概要

附略卷之一は日本に関する概要であり、当時の「生の情報」が一切なく、正史の日本伝を引用している点で『日本考略』と同じだが、『日本考略』は繆鳳林（1929:2）が

大抵取諸史旧文分類排比。而多不能析其時代。

と指摘したように、時代を分けずに、正史の日本伝の内容を沿革、疆域、州郡、属国、山川、土産、世紀、戸口、制度、風俗、朝貢、文詞の分類ごとに並べている。これに対し、『皇明馭倭録』は時代順に、出典ごとに歴代正史の日本伝の一部（『後漢書』『三国志魏書』『梁書』）を除いてほぼ全文

そのまま転載している^{注6}。また『皇明馭倭録』は正史以外の『汎海小録』『倭志四部稿』からも引用している。但し『日本考略』などの日本研究書に多く見られる日本地図は掲載されていない。

2.2 日本関連詩文

附略卷之二は、前半は中国人が作った日本関連の詩及び随筆などより抄出した日本関連のエピソードを掲載している。後半は「日本貢使詩」と呼ばれる日本人（遣明使）が作った漢文（文辞）と漢詩（詩賦）を収録している。日本人の漢文と漢詩は『日本考略』『日本図纂』『日本一鑑』『日本風土記』など他の日本研究書においても見られるが、中国人が作った日本関連の詩文も収録するのは同書の特色である。

中国人の詩文は李白、王維のものを含む詩6首、文1篇で、全て唐代のもの、内容の多くは晁衡（阿倍仲麻呂）に関するものである。王維の文「送秘書晁監還日本国序」と詩「送秘書晁監還日本国」は本来、「送秘書晁監還日本国并序」と一篇のものであったが、ここでは、序文と詩が別々にされている。また、李白「哭晁卿行」の題は『全唐詩』（中華書局本）では「哭晁卿衡」となっている。

「日本王子」以下8篇は日本関連のエピソードで、「日本王子」を除く7篇に出典が明記してある。

出典が示されていない「日本王子」は大中年間（847～860）に入唐した日本の王子が唐の名人顧師言と囲碁の対局をした話で、一部の誤脱を除けば、ほぼ（唐）蘇鶚の『杜陽雜編』巻下の内容に一致している^{注7}。『太平御覧』（巻第二百二十八 博戯）も『杜陽雜編』からこの記事を用いているので、『杜陽雜編』と『太平御覧』のどちらかが出典だと考えられる。但し随筆からの引用が多く見られることから『杜陽雜編』の方がより可能性が高いように思われる。なお、松下見林は早くからこの記事に着目し、その『異称日本伝』（巻上三）において『太平御覧』からこの記事を採録し、

今按大中唐宣宗年号、玉海以此故事繫大中七年、当文德天仁寿三年、然遣我王子於唐及王子事無考。

と指摘している。この話の概要は『旧唐書（宣宗本記）』大中二年の記録にも見られるので^{註8}、その信憑性について考えてみる必要がある。日本の使節が唐の名人と囲碁の対局をしたことに関して言えば、彼の有名な『吉備大臣入唐絵巻』の吉備真備が連想されるが、吉備真備が入唐したのは717年（一回目）と752年（二回目）で、大中二年の848年とは百年ほどの開きがあり、それに王子でもないことから、別人と考えなければならない。王子であり、なおかつ入唐したことがあるという点に着目すれば、高丘親王の存在が浮上する。但し、高丘親王が入唐したのは861年であり、大中二年の848年と十数年の開きがあり、両者が同一人物かどうかは即断が許されない。

『癸辛雜識』からの引用とされる「紙衣和尚」は、筆者が調べた範囲では、四庫全書本『癸辛雜識』（前集）の「葶毒」項において、日本光勝寺の僧について述べる後半の内容が確認できたものの^{註9}、日本僧転智について述べる前半の出自は確認されていない。また「南倭海水」の出典とされる『清波雜記』はおそらく『清波雜誌』の誤りと考えられ、「南倭海水」の内容は『清波雜誌』の巻五において確認されている^{註10}。さらに、「逸書百篇」という題は『双槐歲抄』では「倭国逸書百篇」となっている。「日本国斂尸」は日本の「斂尸」の風習についてのものだが、その出典とされる『墨池浪語』がいかなる書物かは残念ながら確認できていない。

なお、音訳日本語の語彙が見られる『鶴林玉露』（丙編卷之四）の「日本国僧」及び伊呂波の音訳が見られる『書史会要』巻八の「外域」は引用されていない。

一方、日本人が作った漢文と漢詩は延べ15篇あり、『日本考略』のと同様、作者が示されていない。15篇の内、漢文「戒嚴王師行成表」及び漢詩10首（詠西湖、春日感懷、奉邊將、答風俗問、題春雪、游育王、萍、保叔塔、被

張太守禁舟中嘆懷、四友亭)は『日本考略』のものと同じだが、「從紹興雨中往曹娥、又、又、謁舜廟作」の4首は『日本考略』『日本図纂』『日本一鑑』『日本風土記』などになく同書のみに見られるものである。

3 寄語畧の概要

「寄語畧」は、附略卷之二の後に付され、版心に「一～十六」と丁数が刻されていることから、独立した一卷であることが分かる。一～十三丁は語彙の部「寄語畧」で、十三丁の末行から十六丁までは地名の部「寄語島名」である。毎行三段、各段中国語の見出し語の下に、これにあたる日本語・日本の地名が音訳漢字で示されている。

冒頭の「寄語畧」の次に、

籌海図編所載興日本^{マコ}国略微有不同今並存之

という注目の一行がある。この注記によって、同書の音訳日本語は著者が独自で採録したものではなく、『籌海図編』と『日本考略』から引用したものであるということが分かる。と同時に、『籌海図編』『日本考略』両書の「寄語畧」は、異同があったため、結局、並べて掲載することにしたという経緯も分かる。前述したように『日本考略』と『籌海図編』の「日本寄語」を転載する文献は多いが、同書のように、両書の「寄語畧」を同時に掲載する文献は他に例がなく極めて珍しい。

「寄語畧」(語彙の部)では、天文類、時令類、地理類、方向類、珍宝類、人物類、人事類、身体類、器用類、衣服類、飲食類、花木類、鳥獸類、数目類、通用類の順に、『籌海図編』と『日本考略』の寄語を交互に掲載している。

天文類 籌海図編

天 天帝

…

又 日本国畧

天 同

…

時令類 籌海図編

晩 揺撒田午

…

又 日本国畧

晩 揺撒田五

…

といったように、天文類から通用類まで意味分類ごとに、『籌海図編』の寄語を先に、『日本考略』の寄語を後に掲載している。

『籌海図編』の寄語については、上記「天 天帝」のように、見出し語も音訳も全語掲げるのに対し、『日本考略』の寄語については、見出し語は全語掲げるが、音訳は必ずしも全語示すとは限らない。つまり『日本考略』の音訳が『籌海図編』のと同じである場合、上記「天 同」に見られるように、「同」と示すが、「晩 揺撒田五」のように、両書の音訳に違いがあった場合のみ、『日本考略』の音訳も掲げるというふうになっている。

「寄語畧」に続く地名の音訳である「寄語島名」は出典が示されていないが、『籌海図編』から転載したものであることは明らかである。

なお、「寄語畧」では人事類の一丁分が本来あるべき七丁目の位置から外れ、十五丁目に挿入されている。

4 寄語畧について

さて「日本寄語」は「中国資料」の中では特に読みにくいもので知られている。その原因について、

『皇明馭倭録』の「寄語畧」について

本来読みにくい本文が、たびたび転写され、覆刻されるに際し、やはり、日本語を知らないものの手によって行われたために、魯魚焉馬の誤りを重ねて行ったことでなければならない。

と浜田敦（1965:79-80）は指摘している。「日本寄語」の出発点である『日本考略』の原刊本が散佚してしまった現在、実見できるテキストの多くは転写や覆刻によるものだからである。従って、「日本寄語」を正確に読むためには、なるべく多くのテキストを使って比較する作業が必要となる。しかし現存するテキストのほとんどは『籌海図編』から引用したもので、直接『日本考略』から引用したのは『日本図纂』など少ない。それ故、直接『日本考略』から引用した『皇明馭倭録』の存在が明らかになったことで参照しうるテキストが増え、大きな意義があると言えよう。

『皇明馭倭録』所載『籌海図編』と『日本考略』の寄語には、語数をはじめ音訳漢字の用法などに違いが少なからず認められるものの、全体的に言えば『籌海図編』は『籌海図編』系のテキスト、『日本考略』は東洋文庫所蔵明重刊本に近いという傾向が見られる。紙幅の関係上、他本との校異を別稿に譲り、ここでは『皇明馭倭録』に見られる両書の違いを中心にみていくこととする。

4.1 収録語数の違い

総語数は、『籌海図編』は358語、『日本考略』は357語で、『日本考略』の方が1語少ない。『籌海図編』にあって、『日本考略』にない寄語が5語、反対に『日本考略』にあって『籌海図編』にない寄語が4語ある。

『籌海図編』にあって、『日本考略』にないのは次の5語である^{注11}。

大官	大大烏野鷄（人物類）
借	脰路各夾（人事類）
盒子	剛白哥（器用類）

砂石 措路依水（器用類）

磨刀石 依水（器用類）

一方、次の 4 語は『日本考略』にあつて、『籌海図編』にないものである

注¹²。

雷 什洛（天文類）

不見 倭非怕水（人事類）

身 池（身体類）

眼 眉眉（身体類）

4.2 寄語の違い

両書の寄語には、違いが認められるものが 200 語近くに達している。その違いを次のように整理することができる。

4.2.1 見出し語に違いが認められるもの

人事類「倭踈路路」のような例である。その見出し語は、『籌海図編』が「怕」であるのに対し、『日本考略』は「惜」となっている。「倭踈路路」は「オソルル」と読めることから、「怕」の方が正しいと思われる。

4.2.2 音訳がついていない例

『籌海図編』に音訳がなく、『日本考略』のみに音訳が見られるものは 2 例、反対に『日本考略』に音訳がなく、『籌海図編』の方に音訳が見られるものは 3 例ある。前者は、「雲」（天文類）のような例で、『籌海図編』の方には音訳がないのに対し、『日本考略』のには「朽岡」という音訳がついている。後者は、「風」（天文類）のような例で、『日本考略』の方には音訳も「同」も示していないのに対し、『籌海図編』の方には「有珠加前」という音訳がついている。

4.2.3 同音の音訳漢字による置き換え

音訳漢字には、午－五、搭－答、法－發、慢－漫、俚－里、謎－迷、禮－里、措－皆、家－加、爺－耶、依－衣、溢－益、箕－其など、同音と思われるの字による置き換えが見られる。以下はその例である。

『籌海図編』

晩 揺撒田午
 誰人 搭梭
 快来 發下何耶俚法古
 緩 慢大慢大
 衣服 乞麻俚
 爪 卒謎
 買賣 烏禮加
 水銀 明東措尼
 後生 倭家達
 父 阿爺
 石 依水在木古
 老实説 買多溢多
 白酒 明東晒箕

『日本考略』

晩 揺撒田五
 誰人 答梭
 快来 發下何耶里發古
 緩 漫大漫大
 衣服 乞麻里
 爪 卒迷
 買賣 烏里加
 水銀 明東皆尼
 後生 倭加達
 父 阿耶
 石 衣水在木古
 老实説 買多益多
 白酒 明東晒其

4.2.4 音訳漢字の出入り

音訳漢字に脱字が認められるもの。例えば、「孩」（人物門）の音訳は、『籌海図編』では「歪鼻」となっているのに対し、『日本考略』の方が「歪爛鼻」となっている。『籌海図編』の方に「爛」が欠落していると思われる。

4.2.5 その他の違い

音訳漢字には4.2.2～4.2.4以外の違いも認められるが、対比によって正誤が分かるものは少ない。以下がその例である。

『籌海図編』		『日本考略』	
誤	瓜 烏埋	正	瓜 烏俚
正	落雨 挨迷付魯	誤	落雨 挨迷什魯
誤	有 挨路迷路	正	有 挨路何路
正	醉 邀帶	誤	醉 等帶

上記の内、現存各種テキストでは、「瓜」の音訳が「烏俚」となっているのは『皇明馭倭録』の『日本考略』のみである。「瓜」の読みは当然「烏俚」に従うべきである。

4.3 寄語島名

「寄語島名」は『日本考略』にないもので、他本との比較でいえば、「隱岐 和口」において「和計」の「計」が欠けている他、数、音訳漢字など、『日本図纂』『籌海重編』『登壇必究』『日本風土記』のそれとは大差がない。音訳漢字の面では、他本の「奴」は、『日本図纂』では全て「俚」となっているのが特徴である。また、『武備志』では、他本において音訳がついていないいくつかの地名（志摩、遠江、駿河、讃耆、相摩、石見）に独自に音訳が施してあるが、『皇明馭倭録』のこれらの地名には音訳がついていない。

5 まとめ

以上見てきたように、北京図書館本と清華大学図書館本に関する調査で、長い間の懸案であった『皇明馭倭録』「寄語畧」の内容が明らかになった。この「寄語畧」には以下の価値があると考えられる。

先ず、「日本寄語」を転載する文献は多いが、『皇明馭倭録』のように『籌海図編』『日本考略』両書のを同時に掲載するものは他に類を見ない。このことは、『日本考略』を出発点とする「日本寄語」は度重なる転写と復刻によって、すでに著者王士驥の時代ではその姿が大きく変貌していたことを知らしめてくれる。

『皇明馭倭録』の「寄語畧」について

次に、『籌海図編』の「寄語雑類」と「寄語島名」を転載した文献が多く伝わっているが、『日本考略』の「寄語畧」を転載したものはこれまで『日本図纂』以外知られていなかった。『日本考略』の原刊本が散佚した中、同書の「寄語畧」を引用した明代のテキストの発見は、『日本考略』の元の姿を知る上で大きな価値がある。

さらに、『皇明馭倭録』所載の「寄語畧」は、他本のものとは共通する部分が多い。収録語数から、見出し語、音訳漢字に至るまで、違いも少なからず認められるものの、前述の「瓜 烏俚」のように、未解読の寄語の解明に寄与し得る独自のものも含まれているので、課題とされる寄語の解読において価値がある。

なお、『皇明馭倭録』の附略も、多くの文献から引用した日本関連エピソードや他の日本研究書に見られない日本人の漢詩を収録しているなど、注目すべき点が多い。

注：

- 1) 「寄語」とは、すなわち「訳語」の意で、薛俊『日本考略』の「寄語畧」に「寄即訳也、西北日訳、東南日寄」とある。
- 2) 書名は、東洋文庫蔵重刊本の自序では『日本国考略』となっていることから、『日本国考略』とも呼ばれる。
- 3) 『日本図纂』には、「寄語島名」の他日本紀略に百数十個の日本の地名の音訳例が見られる。なお、同書「寄語雑類」の人事類には『日本考略』「寄語畧」にない1語「一家 一董」が含まれている。が、『籌海図編』の「寄語雑類」にはこの語が見られない。従って、『籌海図編』を引用したテキストにもこの語が見られない。
- 4) 『武備志』では、「寄語雑類」と「寄語島名」の名称はそれぞれ「訳語」、「島名」となっている。
- 5) 『日本風土記』と同一内容で、著者が李言恭、郝傑となっている『日本考』（明万曆刊）という書も存在する。
- 6) 『後漢書』は「会稽海外…」以降の部分は引用されていない。『三国志魏書』は「倭地温暖冬夏食生菜…」からの引用となっている。『梁書』の引用は、冒頭か

ら「文身国在倭国東北七千余里…」の直前までである。

- 7) 四庫全書本『杜陽雜編』1042-617~618
- 8) 『旧唐書(宣宗本記)』大中二年の項に、「日本国王子入朝貢方物、王子善碁、帝令待詔顧師言與之對手。」とある。
- 9) 四庫全書本『癸辛雜識』1040-11、1040-12
- 10) 四庫全書本『清波雜誌』1039-38
- 11) 東洋文庫所蔵の重刊本『日本考略』はこれらの語を揃えており、総語数は362語となっている。得月蓂叢書本『日本考略』には、「借 艇路各夾」を除く他の4語がある。
- 12) この4語は、他本(『日本図纂』『籌海図編』『籌海重編』『日本風土記』『登壇必究』『武備志』)でも欠けている。

主な参考文献：

- 汪向榮、嚴大中校注「日本考」(『(中外交通史籍叢刊) 唐大和上東征伝 日本考』所収、中華書局2000年)
- 大友信一(1963)『室町時代の国語音声の研究』至文堂
- 京都大学文学部国語学国文学研究室(1961)『全浙兵制考日本風土記』
〃(1965)『日本寄語の研究』
- 吳 玉年(1947)「明代倭寇史籍誌目」(『中国地理図籍叢考』所収、上海商務印書館)
- 周 輝(宋)『清波雜誌』四庫全書本、上海古籍出版社
- 周 密(宋)『癸辛雜識』四庫全書本、上海古籍出版社
- 薛 俊(明)『日本考略』(『日本寄語の研究』所載明重刊本影印本)
- 蘇 鶚(唐)『杜陽雜編』四庫全書本、上海古籍出版社
- 張 廷玉等(清)『明史』(第六冊)中華書局1974年
- 陳夢雷原編(清)『欽定古今圖書集成』(清雍正三年本、台湾鼎文書局影印本)
- 陶 珽編(清)『續說郛』(清順治丙戌年刻本、台湾新興書局影印本)
- 中山久四郎(1934)『支那史籍上の日本史』(第三版)雄山閣
- 浜田 敦(1940)「国語を記載せる明代支那文献」(『国語・国文』第十卷第七号)
〃(1965)「日本寄語解読試案」(『日本寄語の研究』所収)
- 繆 鳳林(1929)「明人著與日本有關史籍提要四種」(『中央大学国学図書館第二年刊』)
- 福島邦道(1965)「日本国略 日本図纂解題」(『日本寄語の研究』所収)
- 武安隆 熊達雲(1989)『中国人の日本研究史』六興出版
- 龐 元英(宋)『文昌雜錄』四庫全書本、上海古籍出版社
- 安田 章(1961)「日本風土記解題」(『全浙兵制考日本風土記』所収)
- 渡辺三男(1966)『新修訳注日本考』新典社
- (付記：本稿は文学部共同研究の成果の一部である)